アーティストインタビュー
文月奈緒子さん

—どんな子ども時代を過ごされましたか？

文月：とにかく本ばっかり読んでましたね。すごい好きで。3歳ぐらいから自分で読めるようになったので、それからは、もう、とにかく、本っていうか活字が好きで。今でも町内会での回覧板とかも全部読むぐらい、文字があれば読みたい人なので。本当に本ばっかり読んでました。テレビも観ないで。

—本はどんなジャンル？

文月：最初は絵本読んでて、当然ですけど。あとは、小学校入ってからはいわゆる名作もの読んでて、外国の名作もの読んで。途中、小学校の高学年からSF小説にはまって、以来ずっと大学生までSFどっぷりでしたね。

—演劇を始められたのはいつぐらいでした？

文月：何かに所属したことがスタートっていうんでしたら、14歳の時に中学校の演劇部です。14歳の時に演劇部を作ったんですね。なかったもんで（笑）。

—その時は何人ぐらい、部員は？

文月：4、5人ですね。やっぱり、女の子ばっかり。ですね。そこで初めて、ですね。あとは高校は、高校演劇に入ったけど、実際はSF研究愛好会っていうところと掛け持ちしてて、そこの部長だったんで。どっちかというと高校演劇よりもそっちでひたすら書きまくっていた記憶が、小説のようなものを。高校時代はそっちのほうが思い出としてあります。
小学校から結構書いてて。作文みやぎっていう文集があったんですけど、それに載ったり。結構そうやってなんか書いてましたね。

—高校演劇まででそのあとは？

文月：劇団麦、その当時は劇研なんですけど、劇研麦に入って、大学は、大学４年間は劇研麦。大学に演劇部なかったんで（笑）。で、作る気力ももうないし。で、いったん辞めて、就職と一緒にいったん麦やめてみたいな。

—そのあと、お芝居はまた始めるきっかけみたいなのは？

文月：23 歳の時にちょっとした、割と大きい病気して。手術が成功したら芝居をしようって。なんかそれを心の支えに頑張ろうと思って。で、24 歳で劇団を作りました。劇団っていうか、その時はプロデュース公演ですね、今でいう。自分１人で人を集めて、１回ごとにメンバーを変えて。だから１回しかやるつもりなかったんですけど、昔、西武ありましたよね、ams 西武。あそこの企画の人が、うちのところでなんか１本やらないかって言われて、でやって。

—未来樹シアターとして活動始めたのは？

文月：24 歳。

—なるほど。その次、30 歳、40 歳、50 歳って、節目節目に何か、ターニングポイントがありましたか。

文月：24 歳で、未来樹シアターを旗揚げしたんですけど、結局、作・演やって照明やって、なんか疲れちゃって。ちょっとお休みもらったんですよ。2 年ぐらい。辞めたのかな、いったん。その時から蓮沼美紀っていう私の演劇部の後輩が代表になってくれて。そしたら友だちから、「芝居手伝わない？」って言われて手伝いに行ったら、これから旗揚げ公演する人がいるから、経験者にサポートしてほしいって言われて。その旗揚げ公演する人が私の主人で、その時はそんなんでもなかったんですけど。で、29 で結婚して、それを機に、やっぱり同じ劇団に夫婦いるのもなんか嫌だなと思って。

—そうなんだ。

文月：なんとなく私は。同じ芝居の愚痴を言うことになるじゃないですか。それで未来樹にまた戻って。そこから作・演ですね。で、31 で子どもを産んで、でもブランクなしでやってましたね。全然ペース崩さないで。それこそ女性だけの劇団なので、もう授乳しながら演出するとか、とんでもない状態で（笑）。そう言うことでやってました。

—じゃあそこは出産したからお休みっていうことは考えず。

文月：なかったですね。なんか、もう今では信じられないかもしれないけど、なんか、「真剣にやってるんだったら子どもなんか産むわけがない」みたいなことを言う方もいて。やっぱり昔だから、ちょっと外れた生き方をするほうが、えらいみたいじゃないけど、そういう方も多かったんですよね。だから割に批判はありましたね。女だけの劇団っていうこともばかにされたし。なんかどっかの打ち上げで、どうせ夢だなんだっていう話をやってるんでしょって言われて。「いや、そんなことないですよ。観にきてください」って言ったら、「観なくても分かるんだよ」って言われて。なんかそういう。でもその人たちはもうみんないなくなった。性格悪い（笑）。
でもさすがに、35 で 2 人目産んだ時は、もう演出までは無理と思って、で、そこからは書くだけになりました。

—書くだけのペースが落ちたりとかはしなかったんですか？

文月：落ちなかったですね。再演も含めて毎年ぐらいやってたし。ただ、また未来樹やめることにして。っていうのは書いてる人なら分かると思うんですけど、文月の作品はこういうもんだみたいなイメージがついちゃって。うちの主人、辞めた理由も自分で自分のコピーをしてるみたいで辛いって。自分で自分の盗作って言ったのかな。なんか、で、私もなんかその気持ちが分かって。だんだんなんかやっぱり、所属して書いてるのが辛くなって。しかも当て書きしないもんだから、みんな 30 近いのに、中学生が大量に出てくる話とか平気で書くから（笑）。なんか。それで辞めて。そうですね。そのあと、そんな感じですよね。辞めたのが 39 の時。37 の時は芸術選奨の新人賞もらって。で、39 の時に日本劇作家協会の新人戯曲賞最終候補に入って。ですね。

で、そこからずっと書いてたんですけど。40 の時に、うちの母が損害保険の代理店を自営でやってて、私事務員だったので、あ、事務員ってそこのじゃなくて、普通の会社の事務員やってたんで、公演のためになかなか休みを取るのが難しいのを見て、私の仕事を継げば時間は自由に取れるからって言われて。3 年間はほとんど書かないでやっぱりひたすら勉強して。で、3 年経ってよし書くぞと思ったら震災が起きて。またちょっと忙しくなって。で、そのあとに母ががんになって、しかもいきなりもう末期みたいな感じで。40 過ぎてからですよね。で、そこから母の看病をして。父はいろいろ記憶力があやふやになってるから、母を看取って、今度父の介護をして父を看取って、その間はもう全然書けなかったです、やっぱり。子どもがいる時は書けたんですけど、子どもの世話しながらは書けるのに、親の世話をしながらは書けないなって。だから結構その間、46 から 50 代前半までは書いてないですね。ほとんど。頭の中がまとまんなくて。

—人生、今の流れで、人生のターニングポイント？

文月：ターニングポイント。ターニングポイント。なんか、でも、いつも、誰か、観ないで悪いこと言う人もいたけど、観た人がいい話を持ってきてくれて。こういうのがあるよとかこれに出てみないとか。結構そう言う面では。うちの劇団で、ターニングポイントっていうか、客が謎に入る。仙台演劇祭でしたっけ？に、『みどりの想い』って再演で参加したんですけど。
なんかその時に異常に人が入って。なんでこんなに入ったんだろうってぐらい人が入って。そっから人が入るようになりましたね。なんかよく分かんない。よく分かんないっていうか。あれがターニングポイントなのかなと思って。だいたい 3 ステージで、180 か 200 ぐらい席作ってほとんど埋まってたから。

大河原：すごいたくさん貴重なお話と楽しいお話を伺えて。ちょとじゃあ、今振り返って一番印象的なことであったり、ここから先の演劇ってこうなるのかなみたいな。漠然とした質問で恐縮なんですけども。演劇っていうものと自分のお話をフリーでお話してもらってもいいですか？

文月：こうなっていくっていうか、私、今年還暦なんですけど、若い時はまさかその歳で書いてると思わなかったし、でも私たちの代って、割に落ち着かないっ

ていうか、例えば漫画って昔、子どもが読むものだったじゃないですか。でもそれをいつまでも読んでるから、それに合わせて、『ヤングジャンプ』とか、まだ『シルバージャンプ』はないか（笑）。でも、そうやって、いつまでも手放さないで。アニメだって昔はね、私はアニメほとんど観ないんですけど、昔は子どもが観るものなのに、今は深夜やってるじゃないですか。だから結構、変な話、今だったら、そろそろ落ち着いて芝居やめようかなってふうにはならないなって思って。前は、いい歳してちょっと辞めたほういいのかなって。ただ、今、劇場で会う子たちが娘とほとんど同じ歳なんだけど、たぶんそのうち孫になるのかなっていう（笑）。「おばあちゃんと同じ年」とか言われんのかなと思うんだけど。ただ、麦にいた時もそうだったんだけど、この歳でやってる人がいるんだっていうのはいいことだと思ってくれるんじゃないかなと思って。そういうふうに思ってほしいからしばらくやってる。公演を打たなくても、私書くの好きなので、やってない脚本、結構あるんですよ。もう書きかけの脚本が随分あって、途中止まったらやめて別なものを書いて、これ最後まで書けると思ったら最後まで書いて。でも、それこそ上演するの体力いるから、私の体力なんだけど。だから、たぶん、あんがい公演打たなくても書いてると思う。

—それはでも、ご相談して、こういうのないですかって言って、どこかにマッチングしたりっていうことは考えたりはしない？　自分で上演したいっていう感じで。

文月：私はでも、ひびことは作・演やったんだけど、しばらく作だけやってて面白かったのは、私もう脚本渡すと、一切稽古場いかないんですよ。リハ行くぐらいかな。あとは本番。で、なんていうのかな、本番観て、「あれ、これってこういう話だったんだ」って楽しみがある（笑）。すっごいそれが面白くて。嫌なほうで、「え、これこういう話？」っていうのもあるけど。でもなんか、逆に、「あ、これ、こういう意味だったのね」ってやつがあって、よく言うんですけど、自分で書いて自分で演出すると、自分の枠からしか、想像の枠から、あらかじめもう完成が見えちゃってるので、辛いので。私、育て方が下手だから、できた子どもをほかの人に預けたほうが、立派な子になるんじゃないかなって。

—自分の想像の範囲内を、さらにはみ出るものになるっていう。

文月：はみ出るっていうかね、なんか、うまく言えないんですけど、おかっぱの子なのかなと思ったら、モヒカンの子になったみたいな（笑）。でもそれも似合うなみたいな、楽しみがあるじゃないですか。自分の。だから、そうですね、どうしていくか、この先は。ただ、書く体力がなくなってきたので、ひびことのコンセプトが、60 分以内少人数っていうのが、前みたいにやっぱり書くのに体力っていると思うんですよ。前みたいに 2 時間書いてたら、私もう死ぬと思って。今は、考えてる時間は長いんですけど、書く時間は極力、一気にと思って。でないとちょっと、さっき言ったみたいに、お酒飲んでクールダウンするのも無理と思って。でも、ちょこちょこ書いてますね、いろんなのを。だからたぶん、私が死んだらパソコンの中に（笑）、未発表の戯曲が（笑）、出てくるんじゃないかしら。

—発表してください。

文月：でも本当に、やり続けて。ちょっとあれなんだけどね、この歳でやり続けても、シニア演劇の世界にはいけないので。結構私、最初の子ども産みながらやった世代。意図的ではなかったけど、子ども産んでも続けている最初の世代かなと思うんですよ。私が。だから、還暦になってもあの人書いてるわって。書けるうちは書きたいなという。

—書いてください。

文月：で、孫、ひ孫ぐらいと一緒にやれたらいいな。でも、若い人、面白いんじゃないかしらね。60 の人でこういうの書くんだっていう。60 でこういう考えで書く人いるっていうのは、どういうふうにそのことを向こうが捉えるかどうか分かんないけど、いいんじゃないかしらと思います。役者も今、結構ご年配でもやってらっしゃるし。ただ、役者の寿命は長いけど劇作家の寿命って短いんじゃないかって誰かが。誰かと話したんだよね。だって 100 歳の役者はいるけど、100 歳の劇作家はいないよねって話になって（笑）。

—今日はお話を伺わせていただき、ありがとうございました。

文月：こちらこそありがとうございました。